

南条殿御返事

建治二年閏三月二四日 五五歳

かた^帷びら^一、し^塩を^一い^駄ちだ、あ^油ぶ^升ら五^一そ^一う給^身び候^隱ひ了^身んぬ。

ころもは^薬かん^王を^品ふ^にせ^よぎ、又^らね^しつ^とを^くふ^えせ^とぐ。み^をか^くし、み^をか^ざる。法華^經の^第七^巻やく^わう^ぼん^に云^はく「如^裸者^得衣[」]等^云云。心^はは^だか^なる^{もの}の^ころ^もを^へた^るが^ごと^し。も^んの^心は^うれ^しき^事を^とか^れて^候。ふ^ほう^ざう^の人^のな^かに^しや^うな^わし^ゆと^申す^人あり。衣^をき^てむ^まれ^させ^給ふ。こ^れは^先生^に仏^法に^ころ^もを^くや^うせ^し人^{なり}。され^ば法^華經^に云^はく「柔^和忍^辱衣[」]等^云云。こ^んろ^ん山^には^石な^し。み^のぶ^のた^けに^はし^をな^し。石^なき^ところ^には、た^まよ^りも^いし^ずぐ^れたり。し^をな^きと^{ころ}に^は、し^をこ^めに^もす^ぐれ^て候。国^王の^たか^らは^左右^の大^臣なり、左^右の^大臣^をば^塩梅^と申^す。み^そ・し^をな^けれ^ば、よ^わた^りが^たし。左^右の^臣な^けれ^ば国^をさ^まら^ず。あ^ぶら^と申^すは^{涅槃}經^に云^はく「風^のな^かに^あぶ^らな^し。あ^ぶら^のな^かに^かぜ^なし」と。風^をぢ^する^第一^のく^すり^{なり}。

か^たが^たの^物を^くり^給び^て候。御^心ざ^しの^あら^われ^て候^事申^すば^かり^なし。せん^ずると^ころ^は、こ^なん^でう^どの^法華^經の^御し^んよ^うの^ふか^りし^事の^あら^わる^か。王^の心^ざし^をば^臣の^べ、を^やの^心ざ^しを^ば子^の申^しの^ぶると^はこ^れなり、あ^われ^この^うれ^しと^をば^すらん。

つく^しに^をは^しの^太郎^と申^しける^大名^{あり}け^り。大^將ど^のの^御か^んき^をか^ほり^て、か^まく^らゆ^いの^はま、つ^ちの^ろう^にこ^めら^れて^十二^年。め^しは^じめ^られ^しと^き、つく^しを^うち^いで^しに、ご^{ぜん}に^むか^ひて^申せ^しは、ゆ^みや^とる^みと^なり^て、き^みの^御か^んき^をか^ほらん^ことは^なげ^きな^らず。又^ごぜん^にを^さな^くよ^りな^れし^が、い^まは^なれ^ん事^いう^ばか^りな^し。こ^れは^さて^をき^ぬ。なん^しに^ても^よし^にて^も、一^人な^き事^なげ^きなり。た^どしく^わい^にん^のよ^しか^たら^せ給^ふ。を^うな^ごに^てや^あら^んず^{らん}、を^のこ^ごに^てや^候は^んず^{らん}。ゆ^くへ^をみ^ざらん^事く^ちを^し、又^かれ^が人^となり^て、ち^とい^うも^のも^なか^らん^なげ^き、い^かせん^とを^もへ^ども^力及^ばず^とて^いで^にき。

か^くて^月ひ^すぐ^れば、こ^とゆ^へな^く生^まれ^にき。を^のこ^ごに^てあり^けり。七^才の^とし^やま^でら^にの^ぼせ^てあり^けれ^ば、と^もだ^ちなり^ける^ちご^ども、を^やな^しと^わら^ひけ^り。い^へに^かへ^りて^はに^ちを^たづ^ねけ^り。は^のぶ^るか^たな^くして、な^くよ^り外^のこ^とな^し。此^のち^ご申^す、天^なく^して^は雨^ふら^ず、地^なく^して^はく^さを^いず。た^とい^母あり^とも、ち^なく^ばひ^となる^べか^らず。い^かに^父の^あり^どころ^をば^かく^し給^ふぞ^とせ^めしか^ば、母^せめ^られ^て云^はく、わ^ちご^をさ^なけ^れば^申さ^ぬなり。あり^やう^はか^うなり。此^のち^ごな^くなく^申す^やう、さ^てち^のか^たみ^はな^きか^と申^せしか^ば、こ^れあり^とて、を^はし^のせん^ぞの^日記、な^らび^には^らの^内なる^子に^ゆづ^れる^自筆^の状^{なり}。い^いよ^をや^こひ^しくて、な^くよ^り外^の事^なし。さ^てい^かせん^とい^いしか^ば、こ^れより^郎従

あまたともせしかども、御かんきを勸をかほりければ散みなちりうせぬ。そののちはいきてや、
又しにてや、死をとつる音人なしと信かたりければ、語ふしころびなきて、伏いさむるをももち
ゐざりけり。は母いわく、をのれをや己までらに山のぼする事は、寺をやのけうやうのためな
り。仏に花をも家まいらせよ、帰経をも一巻よみて読孝養とすべしと申せしかば、いそぎ寺に
のぼりてい家えかへる心なし。昼夜に法華経を読よみしかば、よみわたりけるのみならず、
そら語に覚をばへてありけり。

さて十二のとし、出家もせずしてかみをつ年み、とかくしてつくしを築にげいでて、
かまくらと申すところへたづねいりぬ。八幡の御前に伏まいりて拜ふしをがみ申しけるは、
八幡大菩薩は日本第十六の王、ほんち本地はりょうぜん霊山浄土、法華経をとかせ給ひし教主積尊なり。
衆生のねがいをみて給はんがために神とあらわれさせ給ふ。今わがねがいみてさせ給へ。
をやは生きて候か、親死死にて候かと申して、いぬの時より法華経をはじめて、成とらの時ま
で讀よみければ、何なにとなくをさなきこへほうでんにひゞきわたり、こゝろ讀すごかりけ
れば、まいりてありける人々も、かへらん事を歸わすれにき。皆人いちのやうにあつまり
てみければ、見をさなき人にて法師ともをばえず、幼をうな女にてもなかりけり。をりしもきや
うの二にみどの御さんけいありけり。人めをしのばせ給ひてまいり給ひたりけれども、御
経のたうとき事つねにも勝すぐれたりければ、はつるまで御聴聞ありけり。さてかへらせ
給ひてをはしけるが、あまりな名ごりのを残しさに人をつけてをきて、大将殿へかゝる事あ
りと申させ給ひければ、めして持仏堂にして御経よませまいらせ給ひけり。

さて次の日、又御聴聞ありければ、西のみかど人さわぎけり。いかなる事ぞとき聞し
かば、今日はめ囚しうどのくび人きらるゝとの頭しりけり。あわれ、わがをやはいままで有
るべしとはを思もわねども、さすが人のくびを頭きらるゝと申せば、我が身のなげきとをも
ひてなみだぐみたりけり。大将殿あやしとごらんじて、わちごはいかなるものぞ、あり
のま件に申せとありしかば、上くだんの事一々に申しけり。をさぶらひ御にありける大名
小名、みすの内、みなそでをしぼりけり。大将殿かぢわらをめしてをほせありけるは、
大はし橋の太郎囚というめしうどまいらせよとありしかば、只今くびきらんとて、ゆいのはま
へつかわし候ひぬ。いまは切きりてや候らんと申せしかば、このち児ご御まへ前なりけれども、
ふしころびな伏きあげり。を泣せのありけるは、かぢわらわれとはしりて、いまだ切らず
ば具ぐしてまいれとありしかば、いそぎいそぎ、ゆいのはまへはせゆく。いまだ致いたらぬ
に呼よばわりければ、すでに時頸切らんとて、刀をぬきたりけると時なりけり。

さてかぢわらを梶はし原の太郎を、なわつ大けながらぐ橋まいりて、を繩にはにひきすへ
たりければ、大将殿この児ち取ごにとらせよとありしかば、ちごはしり下をりて、なわをと
きけり。大はし橋の太郎はわが子とも知しらず、いかなる事ゆへ助にたすかるともしらざりけ
り。さて大将殿又めして、このち児ごにやうやうの御ふせたびて、を布はし施の太郎をた給ぶ
のみならず、本領をもあん安堵ありけり。大将殿をほせありけるは、法華経の御事は、昔よ
りさる事とわき聞つたへたれども、丸は身にあたりてまろ二つのゆへあり。一つには故親父

の御くびを、大上入道に切られてあさましともいうばかりなかりしに、いかなる神仏にか申すべきを思ひしに、走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ、千部と申せし時、高たかをのもんがく房、をやのくびをもて来てみせたりし上、かたきを打つのみならず、日本国の武士の大將を給ひてあり。これひとへに法華經の御利生なり。二つにはこのちごがをやをたすけぬる事不思議なり。大橋の太郎というやつは、頼朝きくわいなりとをもう。たとい勅宣なりともかへし申して、くびをきりてん。あまりのにくさにこそ、十二年まで土のろうには入れてありつるに、かゝる不思議あり。されば法華經と申す事はありがたき事なり。頼朝は武士の大將にて、多くのつみつもりてあれども、法華經を信じまいらせて候へば、さりともとこそをもへとなみだぐみ給ひけり。

今の御心ざしみ候へば、故なんでうどののはたゞ子なれば、いとをしとわをぼしめしけるらめども、かく法華經をもて我がけうやうをすべしとはよもをぼしたらじ。たとひつみありて、いかなるところにをはすとも、この御けうやうの心ざしをば、えんまほうわう・ぼんてん・たひしゃくまでもしろしめしぬらん。釈迦仏・法華經もいかでかすてさせ給ふべき。かのちごのちゝのをなわをとときしと、この御心ざしかれにたがわず。これはなみだをもちてかきて候なり。

又むくりのをこれるよし、これにはいまだうけ給はらず。これを申せば、日蓮房はむくり国のわたるといへばよろこぶと申す。これゆわれなき事なり。かゝる事あるべしと申せしかば、あだかたきと人ごとにせめしが、經文かぎりあれば来たるなり。いかにいうともかなうまじき事なり。失もなくして国をたすけんと申せし者を用ひてこそあらざらめ。又法華經の第五の巻をもて日蓮がおもてをうちしなり。梵天・帝釈是を御覽ありき。鎌倉の八幡大菩薩も見させ給ひき。いかにも今は叶ふまじき世にて候へば、かゝる山中にも入りぬるなり。各々も不便とは思へども、助けがたくやあらんずらん。よるひる法華經に申し候なり。御信用の上にも力もをしまし申させ給へ。あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあらず。各々の御信心のあつくうすきにて候べし。たいしは日本国のよき人々は一定いけどりにぞなり候はんずらん。あらあさましや、あらあさましや。恐々謹言。

のちの
後 三月廿四日

日 蓮 花 押

南 条 殿 御 返 事